

【原 著】

ICT を活用した模擬保健指導における能動的学修の取り組み
—実践的指導力の育成をめざした授業の開発と改善—

加納 亜紀 高橋 香代 上村 弘子 棟方 百熊

Active Learning Approach in Simulated Health Guidance Utilizing ICT
— Class Development and Improvement to Cultivate Practical Learning Instruction Abilities —

Aki KANO, Kayo TAKAHASHI, Hiroko KAMIMURA, Hokuma MUNAKATA

2017

岡山大学教師教育開発センター紀要 第7号 別冊

Reprinted from Bulletin of Center for Teacher Education
and Development, Okayama University, Vol.7, March 2017

ICT を活用した模擬保健指導における能動的学修の取り組み

—実践的指導力の育成をめざした授業の開発と改善—

加納 亜紀^{*1} 高橋 香代^{*2} 上村 弘子^{*3} 棟方 百熊^{*3}

養護教諭の職務の重要な柱である保健指導の実践的指導力を育成するために、養成段階においても能動的学修を推進する必要がある。そこで教職科目「教育方法論」において、ICTを活用した能動的学修として模擬保健指導に取り組んだ。授業では、子どもの実態や健康課題に基づいて指導案を作成し保健指導の設計・実施・評価を一連の流れとしたグループ活動を展開した。平成25年度から平成27年度の3年間の授業開発・改善の結果、「非常に到達目標を達成できた」とする学生は、平成25年度の18.2%から平成27年度は26.7%に増加した。「授業目標や内容が非常に理解できた」のは31.8%から60%、「教材が授業内容の理解や自宅学習に非常に役立った」のは40.9%から60%、2時間以上予習や課題にかける学生も18.2%から40%に増加した。保健指導の実践的指導力を育成し効果的な授業を可能とするためには、模擬保健指導をICTを活用した能動的学修にすることは有効といえる。

キーワード：養護教諭，保健指導，能動的学修，ICT活用，経年比較

※1 聖泉大学看護学部

※2 ぐらしき作陽大学子ども教育学部

※3 岡山大学大学院教育学研究科

I はじめに

1 教師教育に求められるアクティブラーニングへの転換

グローバル化や情報化の進展，少子高齢化など社会の急激な変化は，我が国の教育の在り方に変革を起している。予測困難なこれからの時代をより良く生きるためには，生涯にわたって学び続ける力，主体的に考える力を持った人材の育成が必要とされ，初等教育，中等教育，高等教育それぞれの発達段階や教育段階において有効な教育プログラムの構築や教育方法の質的な転換が求められている（中央教育審議会2012）。

特に教師教育においては，学士課程教育の質の保証というばかりでなく，次世代の育成を担う教師の質の保証という観点からも，これらは喫緊の課題であり，最小限必要な資質能力として実践的指導力を育成することは不可避なミッションとなっている。従来のような知識の伝達・注入を中心とした授業から，学生が主体的に問題を発見し解を見いだしていく能動的学修（アクティブラーニング）への転換が必要とされている（中央教育審議会2015）。

2 養護教諭が行う保健教育への期待の高まりと求

められる実践的指導力の育成

社会の変化とともに学童期の子どもの健康課題の複雑化・多様化が進む現在では，養護教諭が行う保健教育への期待が急速に高まっている。1998年に兼職発令による保健の教科担当が可能になった（文部科学省1998）のを皮切りに，2008年には養護教諭の有する専門性をより保健教育に活用することが求められ（中央教育審議会2008），2009年には学校保健安全法に養護教諭を中心に行う個別の保健指導を明確に規定する条文が新たに設けられた。なお，保健教育は教科として行われる保健学習と子どもの実態に応じて特別活動を中心に行われる保健指導とを合わせたもので，心身ともに健康な子どもの育成を期して教育活動全体で行われるものである。

養護教諭は，これまで救急処置等の保健管理に伴い個別指導を中心に保健指導を担ってきたが，子どもの健康課題に対応する学校保健の中核的な役割として，現在では保健教育全体へのより積極的な参画が要請されるようになってきている。

以上から，今後ますます求められる保健教育の実践的指導力を育成するためには，アクティブラーニング型授業の開発を行うことが必要といえる。そこで，教職科目「教育方法論」において，ICTを活用

表 1. 授業の概要

科目名	教育方法論		
免許法上の位置づけ	教職に関する科目「教育の方法及び技術（情報機器及び教材の活用を含む）」		
対象	看護学部で教職課程を選択した学生		
開講時期	2年生 後期		
履修人数	平成25年度 23名	平成26年度 21名	平成27年度 15名

した能動的学修として学級活動における模擬保健指導（以下、模擬指導）に取り組んだので報告する。

II 授業の概要

1 教育方法論のカリキュラムデザインと改善

授業の概要は表 1 に示すとおりである。教育職員免許法で教職に関する科目に位置づけられている「教育方法論」を対象に、平成 25 年度（H25）から平成 27 年度（H27）までの 3 年間で授業開発と改善に取り組んだ。

教育方法論は、基礎的な保健指導の実践的指導力を養うことを目的に、全 15 回の授業で保健指導の基本的な設計から実施、評価・振り返りまでの一連のプロセスを経験し、その中で情報機器及び教材の活用を含む教育の方法及び技術を身につけるものとした。

全 15 回の授業は、講義（5 回）、グループ活動（7 回）、模擬指導の実践（2 回）、評価・振り返り（1 回）で構成している。講義は、授業を行う上で基本的に必要となる事項を中心に、教育方法の歴史と様々な教育方法・技術、授業の過程と展開、教育評価、保健教育の概念とその目標・内容、指導案の作成や教材・板書・発問・学習形態など教育方法の工夫に関することなどについて理解を深めるものとした。グループ活動は、個々の学生の課外学習をベースに進めるものとした。実際に養護教諭が学校現場で取り組んでいる保健指導（加納ら 2016）の中から、学生各自が取り組むテーマを 1 つ選択し、選択したテーマに基づいて子どもの健康実態について調べ、保健指導を設計する。グループは各自が取り組むテーマや指導対象によって随時編成する。履修人数にもよるが、およそ 1 グループにつき 3~5 人の構成員で 4~5 グループに分かれる。課題に関する話し合い活動を通じて、グループの構成員各自の課題を修正・改善し、その中から実際に授業で発表する指導案を選んで模擬指導を行うための準備を行う。表 2 に、3 年間の取り組みで最終的に定まった授業の展開とそこまでに至る年度ごとの授業運営上の工夫及び変更点について整理したものを示した。

2 ICT の活用

（1）学生による ICT を活用した課題への取り組み
学生自身の ICT 活用能力を高めるために、全 15 回の授業を通じて課したレポートなど課題のほとんどは、一般に汎用性の高い Word や PowerPoint などを中心とした Microsoft 社 Office 製品を利用して遂行させた。

（2）リフレクションの充実と ICT 活用

ICT を活用した能動的学修は効果的な教育方法であるが、小規模大学では ICT 活用に向けた環境整備や教職員への技術的・教育的な支援体制が不十分な実情がある（酒井ら 2015）。本授業を実践した大学においても同様の状況がある。他方で、リフレクションは「反省的思考」「省察」「内省」「ふりかえり」等の用語で呼ばれることもあるが、経験学習の理論と実践において重視されるプロセスであり、学生の経験学習を深めるためには欠かせない活動といえる。

そこで、Google drive や YouTube など Web 上で公開されている既存のクラウドサービスを、学生にとって最も身近な情報機器であるスマートフォンを使って利用することによりリフレクションの充実とシステム導入にかかるコストや労力の低減を図った。

クラウドサービスとは、従来は手元のコンピュータで管理・利用していたようなアプリケーションソフトやデータなどをインターネットなどのネットワークを通じてサービスの形で提供しているもので、それらを必要に応じて利用することをクラウドコンピューティングという。つまりネットに接続して必要な場所にアクセスさえすれば、アプリケーションを意識せずに必要な機能を使えるというものである（鷲尾 2011）。

本授業のリフレクションは、年度ごとに内容を見直し変更を加えた（表 2）が、H27 は自己に対する評価（自己評価）及び他者に対する評価（他者評価）を相互評価としてその結果の閲覧と模擬指導の様子を録画した動画の視聴を踏まえて、ディスカッションによって行った。評価には Web アプリケーションサービス Google drive フォームで作成した Web アンケートを、動画視聴には動画共有サイト YouTube を利用した。

クラウドサービスでは、Web アンケートや動画を作成すると同時にタグが生成される。それを QR コードに変換し紙資料にして学生に配布し、スマートフォンで読み取らせることで、授業中の評価や動画

表2.授業の展開と年度ごとの工夫及び変更点

		年度ごとの授業運営上の工夫と変更点※2	
		平成25年度	平成26年度
第1～5回 講義	授業の展開	課外 課題① 学習指導要領・解説を精読し、保健学習及び特別活動の目標・学習内容、義務教育活動段階の子どもの発達の特徴について把握する 課題② 担当したチームに関する子どもの健康状態に関する調査レポートの作成 課題③ 調べた子どもの健康状態を元に、小学校低・中・高学年・中学校の各段階に合わせた指導内容を考える 課題④ 担当になった学年に関する指導案の作成（教員へ随時相談） 課題⑤ 指導案の修正・改善（教員へ随時相談） ○ 模擬保健指導の教材や指導役の原稿作成（教員へ随時相談）	① 課題①をレビューしてポイントを整理する ② 養護教諭が実際に持っている保健指導内容から取り組むチームを一つ選択する ③ 同一チームでグループを編成
	授業中 ① 本授業のねらいと進め方・評価方法を理解する ② 主な講義内容 ○ 教育方法の歴史と様々な教育方法・技術 ○ 授業の過程と展開（設計・実施・評価） ○ 教育評価の意義と方法 ○ 保健教育の概念の整理 ○ 学習指導要領における保健学習、特別活動（学級活動）の目標と内容、その系統性や関連性 ③ 養護教諭が実際に持っている保健指導内容※1から取り組むチームを一つ選択し、同一チームでグループを編成する	① 子どもの健康状態レポート（課題②）について、グループ内でピアレスポンスを行い、改善点がある場合は調べ直し ② 課題②に基づいて、小学校低・中・高学年、中学校の各段階での指導内容と方法について、ラウンドロビンによるディスカッションで検討し、指導案を作成する ③ 対象学年が同じ学生同士でグループを再編成する ④ 各自が作成した指導案（課題④）のねらいと展開についてラウンドロビンによるディスカッションを行い、改善点を修正する ⑤ 対象学年が同じグループで各自が作成した指導案の中から一つを選び、指導案の実施について、グループで役割を分担し、作成する教材や発問の内容を検討・協議しながら準備を行う ○ 教員は、指導案の書き方、授業展開、板書、発問や指示の出し方について、授業内外で随時助言する	① 課題①を踏まえ、学習指導要領・解説でのポイントを実際読みながら解説する ② 養護教諭が実際に持っている保健指導内容から取り組むチームを一つ選択する ③ 同一チームでグループを編成 ④ 教員は、指導案の書き方、板書、机間巡回、指示や発問の方法について具体例を資料で配布して解説する
第6～14回 グループ活動	授業の展開	① グループ内で役割を分担する ● リーダー：健康状態を調べ、構成員の意見や取り組み内容の調整 ● 構成員：子どもの健康状態に基づいて、担当学年に適した指導案の考案・修正 ② 同じチームのグループで話し合いながら、リーダーの調整のもと、各構成員の指導案を推敲 ③ できた指導案から一つ選択し、模擬保健指導の準備をする	① 子どもの健康状態レポート（課題②）について、グループ内でピアレスポンスを行い、改善点がある場合は調べ直し ② 課題②に基づいて、小学校低・中・高学年、中学校の各段階での指導内容と方法について、ラウンドロビンによるディスカッションで検討し、指導案を作成する ③ 担当学年が同じ学生同士でグループを再編成する ④ 各自が作成した指導案（課題④）のねらいと展開についてラウンドロビンによるディスカッションを行い、改善点を修正する ⑤ グループで各自が作成した指導案の中から一つを選び、模擬保健指導の準備をする ⑥ 指導の準備の過程で生じた課題は相談しながら随時改善する
	① 本授業のねらいと進め方・評価方法を理解する ② 主な講義内容 ○ 教育方法の歴史と様々な教育方法・技術 ○ 授業の過程と展開（設計・実施・評価） ○ 教育評価の意義と方法 ○ 保健教育の概念の整理 ○ 学習指導要領における保健学習、特別活動（学級活動）の目標と内容、その系統性や関連性 ③ 養護教諭が実際に持っている保健指導内容※1から取り組むチームを一つ選択し、同一チームでグループを編成する	① 子どもの健康状態レポート（課題②）について、グループ内でピアレスポンスを行い、改善点がある場合は調べ直し ② 課題②に基づいて、小学校低・中・高学年、中学校の各段階での指導内容と方法について、ラウンドロビンによるディスカッションで検討し、指導案を作成する ③ 担当学年が同じ学生同士でグループを再編成する ④ 各自が作成した指導案（課題④）のねらいと展開についてラウンドロビンによるディスカッションを行い、改善点を修正する ⑤ グループで各自が作成した指導案の中から一つを選び、模擬保健指導の準備をする ⑥ 指導の準備の過程で生じた課題は相談しながら随時改善する	
第13・14回 模擬 保健指導	授業の展開	○ 教員は、①相互評価の結果をグループごとに集計して資料にするとともに録画ビデオを編集しYouTubeにアップロード ○ 教員は、事前に司会や授業グループの発表方法を資料を示しながら具体的に説明 ○ 教員は、事前に司会や授業グループの発表方法を資料を示しながら具体的に説明 ○ 教員は、事前に司会や授業グループの発表方法を資料を示しながら具体的に説明	① 学生による自主運営（司会、タイムキーパー、写真） ○ 教員は、事前に司会や授業グループの発表方法を資料を示しながら具体的に説明 ② 相互評価をWebアンケートで実施 ③ 模擬指導の様子をビデオ録画
	① 相互評価の結果をグループごとに集計して資料にするとともに録画ビデオを編集しYouTubeにアップロード ○ 教員は、事前に司会や授業グループの発表方法を資料を示しながら具体的に説明 ○ 教員は、事前に司会や授業グループの発表方法を資料を示しながら具体的に説明	① 学生による自主運営（司会、タイムキーパー、写真） ○ 教員は、事前に司会や授業グループの発表方法を資料を示しながら具体的に説明 ② 相互評価をWebアンケートで実施 ③ 模擬指導の様子をビデオ録画	
第15回 リアルセッション	① 自分たちのグループの模擬指導の振り返り YouTubeで自分のグループの動画を視聴し、相互評価の集計結果を参照しながら、グループディスカッションし、振り返る。	① 動画視聴と相互評価集計結果をもとにディスカッション ② ディスカッションで得た気づきや改善点をレポートする	

※1…養護教諭の実践の保健指導内容は、加納ら（2016）にまじめられている表を引用して学生に提示している。

※2…年度ごとの変更点は、前年度と変更した部分を赤字で示した。

視聴を可能にした。第13・14回目の模擬指導時に行った学生による評価の回答は、フォームに連動したスプレッドシート(表計算)にリアルタイムに記録・蓄積されるため、授業者は集まったデータをダウンロードして適宜編集し、第15回の最終授業で集計結果を学生に提供した。

Web アンケートを利用する際の配慮として、外部の人間から個人が特定できる情報の入力に極力避け、データ収集後は速やかにクラウド上のデータは削除した。動画については、授業の履修者以外の閲覧や視聴ができないようにあらかじめ設定に制限を加えた。同時に、学生にも履修者以外に動画などをむやみに見せることのないよう注意した。

Ⅲ 授業改善の成果

1 模擬指導の相互評価の比較

(1) 方法

教育方法論を履修した学生(表1)が行った模擬指導の相互評価の結果を比較した。評価は、「1. 児童生徒の実態を踏まえた内容にできていたか」「2. 指導のねらいは明確にできていたか」「3. 指導のねらいに対して、指導内容は適切といえるか」「4. 指導の対象に適した内容になっていたか」「5. 指導の展開(学習の流れ)をよく工夫したか」「6. 指導の準備は十分できたか」「7. 説明や指示の内容は明快でわかりやすくてできたか」「8. 声の大きさ、トーン、話すテンポなど話し方に注意できたか」「9. 指導の展開はよかったか」「10. こども役の反応に応じた応

答ができたか」「11. 教材資料はわかりやすくてできたか」「12. グループで協力して指導することができたか」「13. 指導のねらいや意図を理解させることができたか」「14. 学んだ内容は日常生活で実践できる内容になっていたか」「15. 子どもに楽しく活動させることができたか」の15項目について5段階で(5. 大変よい～1. 不十分)行った。なお、平成25年度に関しては、他者評価のみを行い4段階評価であったため単純に比較できないが、参考までに結果を示した。

(2) 分析方法

H26とH27の相互評価の結果について、t検定を用いて各項目の平均値を比較した。

(3) 結果と考察(表3)

H26とH27の相互評価は、ともに自己評価より他者評価の方が評価は高かった。

H26とH27の自己評価を比較したところ、H26に比べH27は教材資料のわかりやすさ(H26=3.25±0.97, H27=3.93±0.88, mean±SD)とねらいや意図の理解(H26=3.1±0.72, H27=3.73±0.88)に関する自己評価は有意に高かったが、楽しい活動(H26=3.9±0.85, H27=3.2±1.01)については有意に低かった。自己評価の高い順に5項目を比較すると、H26は楽しい活動(3.9±0.85)、日常生活における実践可能性(3.8±0.62)、展開の工夫(3.75±0.72)、グループの協力体制(3.7±0.87)、スムーズな展開(3.55±0.69)

表3. 模擬保健指導における相互評価

	平成26年度		平成27年度		自己vs自己	他者vs他者	平成25年度
	自己評価 n = 20	他者評価 n = 60	自己評価 n = 15	他者評価 n = 45	t値	t値	他者評価(参考) n = 87
1. 実態と内容の関連性	3.50 ± 0.69	3.68 ± 0.79	4.00 ± 0.85	4.16 ± 0.74	-1.929	-3.114 **	2.98 ± 0.73
2. 指導のねらいの明確さ	3.45 ± 0.61	3.73 ± 0.78	3.67 ± 0.72	4.29 ± 0.55	-0.964	-4.085 ***	3.02 ± 0.57
3. ねらいに沿った指導内容	3.40 ± 0.60	3.63 ± 0.74	3.53 ± 0.83	4.20 ± 0.69	-0.551	-4.001 ***	3.08 ± 0.58
4. 対象に適した内容設定	3.25 ± 0.97	3.60 ± 0.83	3.27 ± 1.03	4.09 ± 0.67	-0.049	-3.347 ***	3.15 ± 0.56
5. 展開の工夫	3.75 ± 0.72	3.77 ± 0.79	3.73 ± 0.88	4.29 ± 0.66	0.062	-3.592 ***	2.85 ± 0.80
6. 指導の準備	3.20 ± 0.95	3.90 ± 0.71	3.67 ± 0.90	4.60 ± 0.58	-1.469	-5.419 ***	3.18 ± 0.79
7. 説明・指示の明快さ	3.30 ± 0.66	3.65 ± 0.71	3.40 ± 1.12	3.96 ± 0.88	-0.331	-1.972	2.92 ± 0.72
8. 声の大きさ、トーン、話すテンポなど話し方	3.35 ± 0.81	4.10 ± 1.02	3.47 ± 0.99	4.13 ± 0.76	-0.383	-0.192	2.86 ± 0.73
9. スムースな展開	3.55 ± 0.69	3.72 ± 0.67	3.80 ± 0.94	4.27 ± 0.65	-0.910	-4.220 ***	2.87 ± 0.68
10. こども役の反応に応じた応答	3.30 ± 0.92	3.60 ± 0.92	3.13 ± 0.92	3.87 ± 1.10	0.530	-1.348	2.98 ± 0.65
11. 教材資料のわかりやすさ	3.25 ± 0.97	3.47 ± 0.93	3.93 ± 0.88	4.42 ± 0.72	-2.146 *	-5.720 ***	3.33 ± 0.69
12. グループの協力体制	3.70 ± 0.87	3.77 ± 0.75	3.60 ± 1.06	4.04 ± 0.88	0.308	-1.751	2.92 ± 0.73
13. ねらいや意図の理解	3.10 ± 0.72	3.60 ± 0.67	3.73 ± 0.88	4.00 ± 0.74	-2.339 *	-2.900 ***	2.98 ± 0.61
14. 日常生活における実践可能性	3.80 ± 0.62	3.45 ± 1.00	3.60 ± 0.83	4.20 ± 0.63	0.821	-4.714 ***	3.29 ± 0.81
15. 楽しい活動	3.90 ± 0.85	4.03 ± 0.94	3.20 ± 1.01	4.31 ± 0.67	2.217 *	-1.690	3.40 ± 0.67

※1…値はmean±SD, 有意確率はp<0.05*, p<0.01**, p<0.001***である。

※2…自己評価と他者評価の各々について、平成26年度と平成27年度の平均値をt検定を用いて比較した。

で、H27は実態と内容の関連性(4.0±0.85)、教材資料のわかりやすさ(3.93±0.88)、スムーズな展開(3.8±0.94)、展開の工夫(3.73±0.88)、ねらいや意図の理解(3.73±0.88)であった。

以上から、H26は自分たちが実施した模擬指導の指導場が上手くできたかどうかというパフォーマンスに評価の軸が置かれていたのに対し、H27はいかに子どもの実態に即して必要なことを学ばせる授業にするかという授業のデザインに評価の重点が置かれるようになったことを示した。

H26とH27の他者評価の比較では、説明指示の明確さ、声の大きさ、トーン、話すテンポなど話し方、子ども役の反応に応じた応答、グループの協力体制、楽しい活動といった実際の指導に関わる項目に有意の差は見られず、それ以外の項目でH26に比べH27は有意に評価が高かった。他者評価の高い順に5項目を比較すると、H26は話し方(4.1±1.02)、楽しい活動(4.03±0.94)、指導の準備(3.9±0.71)、展開の工夫(3.77±0.79)、グループの協力体制(3.77±0.75)であり、H27は指導の準備(4.6±0.58)、教材資料のわかりやすさ(4.42±0.72)、楽しい活動(4.31±0.67)、展開の工夫(4.29±0.66)、指導のねらいの明確さ(4.29±0.55)であった。つまり、H26は実際の指導場面の評価を中心にしているのに比べ、H27は模擬指導の設計や準備の内容にも積極的な評価の目が向けられるようになったと考えられる。

2 教育方法論の授業評価の比較

(1) 方法

同じ学生を対象に、教育方法論の授業終了時に行った授業評価の結果を比較した。H25は22名、H26は21名、H27は15名が回答していた。授業評価の内容は、「シラバスの授業の目標、内容、評価方法など理解できましたか」「この授業の教材(テキストや資料など)は、授業内容の理解や自宅学習に役に立ちましたか」「この授業を受けるにあたって予習や準備・課題のために1回あたりどの程度時間をかけていますか」「この授業の到達目標をどの程度達成できましたか」の4項目であった。

(2) 結果と考察(表4)

この授業評価は、大学のFD活動として半期ごとに実施されているものであり、結果が大学事務局でまとめられたあと、授業担当者に単純集計の結果や学生からの意見やコメントが返される。今回、単純な集計結果のみのデータであるが、学生の率直な状況が把握できる貴重な資料であると捉え、3年間の推移を比較した。

H25からH27の3年間の授業評価について、授業展開上の変更が多かったH26で一度評価が低下するものの「非常に到達目標を達成できた」とする学生は、H25の18.2%からH27は26.7%に増加した。「授業目標や内容が非常に理解できた」のは31.8%から60%、「教材が授業内容の理解や自宅学習に非常に役立つ」のは40.9%から60%、2時間以上予習や準備・課題にかける学生も18.2%から40%に増加した。一方で、予習時間が1時間未満の学生や到達目標があまり達成できなかったとする学生も一定数存在しており、アクティブラーニングをすすめるほど、授業へのモチベーションの高い学生とそうでない学生とで学びの成果に2極化が認められた。

IV まとめ

今回、看護系大学の養護教諭養成において、保健指導の実践的指導力を育成することを目的に、ICTを活用して模擬保健指導における能動的学修に取り組んだ。授業の開発・改善の結果、学生らは指導場面での技術や方法に目を向けるだけでなく、保健指

表4. 授業評価の結果

	平成25年度 N=22 (100%)	平成26年度 N=21 (100%)	平成27年度 N=15 (100%)
シラバスの授業の目標、内容、評価方法など理解できたか。			
4. 非常に理解できた	7 (31.8)	4 (19.0)	9 (60.0)
3. ある程度理解できた	14 (63.6)	17 (81.0)	6 (40.0)
2. あまり理解できなかった	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)
1. 理解できなかった	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)
授業の教材(テキストや資料など)は、授業内容の理解や自宅学習に役立ったか。			
4. 非常に役立っている	9 (40.9)	5 (23.8)	9 (60.0)
3. ある程度役立っている	13 (59.1)	15 (71.4)	6 (40.0)
2. あまり役立っていない	0 (0.0)	1 (4.8)	0 (0.0)
1. 役立っていない	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)
予習や準備・課題のために1回あたりの程度時間をかけているか。			
4. 2時間以上	4 (18.2)	4 (19.0)	6 (40.0)
3. 1~2時間	9 (40.9)	10 (47.6)	2 (13.3)
2. 0.5~1時間	3 (13.6)	4 (19.0)	5 (33.3)
1. ほとんどしていない	6 (27.3)	3 (14.3)	2 (13.3)
この授業の到達目標をどの程度達成できましたか。			
4. 非常によくできた	4 (18.2)	1 (4.8)	4 (26.7)
3. ある程度できた	18 (81.8)	18 (85.7)	9 (60.0)
2. あまりできなかった	0 (0.0)	1 (4.8)	2 (13.3)
1. できなかった	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)

導を意味あるものにするための授業設計や準備の段階にも意識を向けられるようになっていた。また、3年間の授業改善の内容と並行して授業評価も向上した。保健指導の実践的指導力を育成し効果的な授業を可能とするためには、模擬保健指導を ICT を活用した能動的学修にすることは有効といえる。

ただし、授業改善は授業に対する学生らの感想や意見も踏まえて行ったが、限られた授業時間の中で学生の学びや気付きを深めるためには、単に ICT を活用すればよいのではなく、ICT を利用して効率化できる部分と対面で丁寧に時間をかけて指導しなければならない部分とのバランスを考えて取り組む必要があることに注意したい。H26 で授業評価が低下したのは、その影響によるものと推察される。

V 今後の展望

養護教諭の養成は、教育系大学だけでなく看護系、心理や栄養などの学際系、短大系など多様な学問的背景を持った大学で養成されている。特に、看護師免許に加えて養護教諭免許を取得できる看護系大学の場合は、過密カリキュラム、免許法上の規定の最低限の科目開設、本来養護教諭の養成目的ではない科目を関連科目で代用させる授業の読み替えといった問題が指摘されている(岡田 2014)。本授業を実践した大学は、平成 23 年度に看護学部が新設され、その際に養護教諭 1 種免許状の取得を可能とする教職課程を設置した。上述したと同様の問題を抱えている。養護教諭養成のために開設された最低限の科目の中で、いかにして実践的指導力育成を図っていくかが重要な課題といえる。

中央教育審議会(2015)は、今後の我が国の教員養成に関する改革の具体的な方向性として、教職課程における教科と教職の統合を掲げ、従来の「教科に関する科目」と「教科の指導法」のより一層の連携を図っていくことが重要としている。養護教諭の場合は、免許法上に保健指導に関する科目だけでなく、「教科の指導法」に関する科目の位置づけはない。

今回、教科と教職の統合の観点から、教職科目『教育方法論』で養護教諭にとっての教科にあたる保健指導と指導法に関する内容を取り扱ったことは先駆的な取り組みと考える。

今後は、模擬指導の評価項目の妥当性について検討し直すとともに、3年間で開発・改善した本授業の前後で教育効果を検証することにより、より効果

的な授業を提供できるようにしたい。

付 記

本論文は、加納(2016)が発表した実践報告を発展させ、再構成してまとめたものである。

文 献

- 加納亜紀(2016) ICT を活用した模擬保健指導における能動的学修の取り組み. 一般社団法人日本学校保健学会第 63 回学術大会講演集, 58 Suppl.: 209
- 加納亜紀, 上村弘子, 田嶋八千代, 高橋香代(2016) 養護教諭が行う保健指導の現状—個別及び集団の保健指導の校種間比較—. 学校保健研究 57(6): 323-333
- 文部科学省(1998) 教育職員免許法の一部を改正する法律等の公布について. http://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/nc/t19980625001/t19980625001.html (参照日 2017.1.1)
- 岡田加奈子(2014) 養護教諭養成教育機関の現状と課題. 学校保健研究 56(5): 346
- 酒井博之, 辻靖彦, 稲葉利江子(2015) 高等教育における ICT 活用実態と大学規模の関連. 日本教育工学会論文誌, 39Suppl.: 69-72
- 中央教育審議会(2008) 子どもの心身の健康を守り、安全・安心を確保するために学校全体としての取組を進めるための方策について(答申). http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/_icsFiles/afieldfile/2009/01/14/001_4.pdf (参照日 2017.1.1)
- 中央教育審議会(2012) 新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～(答申). http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1325047.htm (参照日 2015.12.22)
- 中央教育審議会(2015) これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について～学び合い、高め合う教員育成コミュニティの構築に向けて～(答申). http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1365665.htm (参照日 2017.1.1)
- 鷲尾敦(2011) Google Apps などのクラウドを用いた授業支援—「秘書情報演習」、公開講座等における事例—. 高田短期大学紀要(29): 115-126

Active Learning Approach in Simulated Health Guidance Utilizing ICT

―Class Development and Improvement to Cultivate Practical Learning Instruction Abilities―

Aki KANO*1, Kayo TAKAHASHI *2, Hiroko KAMIMURA *3 Hokuma MUNAKATA *3

Keywords: Yogo Teacher, Health guidance, Active Learning, ICT, Chronological Changes

*1 Faculty of Nursing, Seisen University

*2 Kurashiki Sakuyo University

*3 Graduate School of Education, Okayama University
